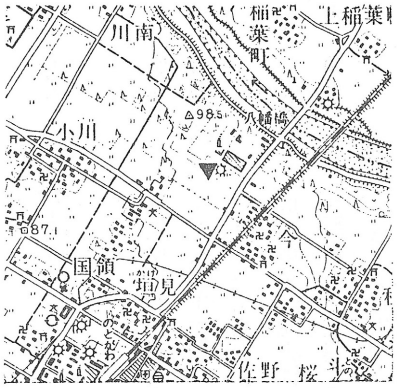
滋賀・柿堂（かきゅうどう）遺跡

1　所在地　滋賀県神崎郡能登川町大字今字柿堂
2　調査期間　一九八四年（昭59）四月～一九八六年八月
3　発掘機関　能登川町教育委員会
4　調査担当者　山本一博
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　弥生時代後期、奈良時代末期～鎌倉時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

柿堂遺跡は彦根市との境界である愛知川と、通称朝鮮人街道と呼ばれる県道の交差点西側に位置する。付近にはいわゆる神崎郡条里が広い範囲にわたって遺存しており、標高は約九〇mを測る。一九八四年より工場の拡張工事に伴う事前発掘調査を、能登川町教育委員会が実施しており、一九八六年で終了の予定である。主な検出遺構は、条里方向にのっとった平安時代後期の溝跡・掘立柱建物跡のほか、弥生時代後期の自然河道・方形周溝墓、奈良時代末期～平安時代前期の自然河道である。木簡は、この河道より二点出土した。



（彦根西部）

8　木簡の釈文・内容

(1)　135×25×3　033

・□□錦織主寸□〈人カ〉〈〉」
・□□　小白在　〈〉」

まず文字は表裏両面に認められる。そして木簡の形態と文字の関係であるが、この両者はセットではないと考えられる。長方形の材の一端を尖らせ、他端の側面の一方に切り込みをいれたこの形態は完形品と判断される。このため、偏を欠く「綿織」の文字は、この木簡が本来もう少し巾の広いものであったことを想像させる。また「小白在」はほぼ中央に位置するものの、「綿織」などと同一人の手によるものと思われる。さて「綿織」であるが、綿織主寸□という人名の可能性もあり、『日本書紀』天智天皇四年二月条の「以二百済百姓男女四百余人一居二于近江国神前郡一」との関連が考えられるほか、付近に鎮座する西郡神社と音が共通することも興味深い。

（山本一博）